

題目：ウマにヒトの情動は伝染するか？—ヒトが表出した自然な情動を用いた実験的検討

—

氏名：上田江里子

指導教員：瀧本彩加

他個体の情動を認知することは社会生活を送るうえで適応的である。その情動認知を促進していると考えられているのが情動伝染である (e.g., Hoffman, 2000)。ネガティブな情動の伝染は幅広い種の動物で見られている一方で、ポジティブな情動の伝染はあまり見られていない。ただし、どちらの情動伝染も親しい個体間で生じやすいこともわかっている (e.g., Palagi et al., 2015)。しかし、異種個体間の情動伝染についてはイヌとヒト間でしか調べられておらず、ヒトとヒト以外の動物との情動伝染がイヌにのみ起こるのか、ヒトとパートナー関係を築いてきた他の家畜動物でも起こるのかは検討が進んでいない。そこで本研究では、情動を喚起させる動画をヒトが見たときの自然な反応を呈示し、ウマにヒトの情動が伝染するか、その情動伝染に親密さが影響するかを検討した。注視時間の中央値について、応答変数を注視時間、説明変数を親密さと情動とその交互作用とし、一般化線形モデルを用いて分析したところ、親密さの主効果が有意傾向であった。ウマは、担当者よりも未知者を長く注視する傾向にあったのである。また、ウマとヒトの心拍数の時系列的類似性について、2 (親密さ) × 3 (情動) の反復測定分散分析をおこなったところ、交互作用が有意であった。多重比較をおこなった結果、悲しみ条件において担当者条件と未知者条件の間に有意差が見られ、未知者条件において中立条件と悲しみ条件の間に有意傾向の差が見られた。つまり、担当者が悲しい動画を見ているときよりも未知者が悲しい動画を見ているときに、ウマとヒトの心拍数の時系列的類似性が高い傾向にあった。また、未知者が中立の動画よりも悲しい動画を見ているときに、ウマとヒトの心拍数の時系列的類似性が高い傾向にあった。したがって、本研究では、ウマにヒトの情動が伝染するという結果は得られなかった。ただし、ウマが未知者を長く見て、未知者の悲しみを見ているときにはウマとヒトの心拍の時系列的類似性が高まることから、ウマは生理反応を一致させることで判別が難しい未知者の見慣れない悲しみという情動の読みとりを促進している可能性が示唆されたと考えている。今後はサンプルサイズを増やし、親密な人からの情動伝染や、ポジティブな情動の伝染が起こる可能性についても検討したい。